

霞 富士雄 (著)

乳がん視・触診アトラス

坂元吾偉

(坂元記念クリニック・乳腺病理アカデミー院長)

敬愛する著者、霞富士雄先生の『乳がん視・触診アトラス』を手にしたとき、その圧倒的な症例の多さと写真の出来栄への見事さに息をのんでしまい著者の執念を感じた。

著者と小生は乳腺外科と乳腺病理と部署は分かれていても、30年以上も癌研で共に乳腺疾患の診療と研究に携わってきた。小生も乳腺疾患のすべての組織型の病理組織標本の収集を心がけてきたので、これだけの症例の写真をそろえることは日々の努力以外の何ものでもないことを身に染みて知っている。著者もはしがきに述べているように、「本書のような乳がんを中心とした多彩で徹底的な乳腺疾患のカラーアトラスを内外ともに私は知らない。待っていても将来、同じようなものができあがることはないであろう」。

本書は初めに正常乳房の観察や視・触診の行い方に約50枚の写

真を費やしている。そして、アトラスだけに写真の説明文だけで文章はほとんど無いにもかかわらず、その中に著者の患者さんに対する優しさと、後輩に対して視・触診の真髄を伝えようとする真剣さを感じられる。また同時に、写真であるから視診のみかと思うと、すばらしい写真の呈示により触診の妙まで伝えてくれる。まさに視・触診アトラスである。

さすがに症例数がわが国で最も多い癌研だけあって、極めて多くの症例が網羅されている。例えば葉状腫瘍の項を見たい。葉状腫瘍には良性、境界型、悪性とあり、一般的には悪性が大きく良性は小さいのであるが、良性にもかかわらず小児頭大を超える大きさになり、それに伴って皮膚の変化が起こる症例を果たしてどれだけの人が知っているだろうか。

最後に、小生なりに著者がこのアトラスに情熱を注いだ心の奥を

見てみたい。著者と小生が30年以上にわたって携わってきた乳がんの診断と治療は、この間大きく変化してきた。1980年までのマンモグラフィ以前は、乳がんの診断はまず視・触診だったが、現在は画像診断としてマンモグラフィ、超音波、MRI、CTと多岐になり、ややとすると視・触診を軽視する風潮がないでもない。乳がんの手術でも乳房全切除から乳房部分切除へと移行し、可能な限りのリンパ節郭清からセンチネルリンパ節生検へと変わってきた。そこで最初から乳房部分切除やセンチネルリンパ節生検を習った若い先生の中には、きっちりとした乳房全切除やリンパ節郭清が出来ない人が出始めたとの話も聞こえてくる。小生の専門とする病理でも、乳腺腫瘍の良悪性の鑑別をいきなり免疫染色にたよる風潮があるが、病理診断の基本はあくまでHE標本にあることと相通じている。すなわち外科における視・触診と病理におけるHE標本はいずれも診断の基本であり、その基本がゆらぐと診断全体が砂上の楼閣となることを著者は言いたかったのではないだろうか。

●A4/頁 324/2009年/定価 17,850円 (本体 17,000円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00804-4]
医学書院 刊